



JPC NEWS Vol.16

Japan Pentecostal Council

2019 JUNE

日本ペンテコステ協議会 JPC ニュース

「巻頭言」

土屋潔(日本ペンテコステ協議会 議長/日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団 理事長)

「アジアに連なる」

- ◆イエス・キリスト福音の群れ/阿見高洋 ◆神の家族キリスト教会/井野口靖久
- ◆サンビ教団/辻秀彦 ◆シオン宣教団/安達隆夫 ◆単立ペンテコステ教会フェローシップ/吉田隆
- ◆日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団/藤村良彦 ◆日本オープンバイブル教団/小川教将
- ◆日本チャーチオブゴッド教団/伊藤正澄 ◆日本ネクスト・タウンズ・ミッション/竹内宜雄
- ◆日本フォースクエア福音教団/ジョン・バチガルボ ◆日本ベテルミッション/津坂良夫
- ◆日本ペンテコステ教団/榮義之 ◆フルゴスペル(純福音)日本総会/志垣重政

JPC
Japan Pentecostal Council

■巻頭言

1%の壁を壊す可能性が

萌芽し始めている時でもあります。

ここに神からの恵みの“とき”であることを感謝しつつ、

これらの風(変化)にしっかりと向き合いながら、

知恵と啓示の霊に満たされることに渴きながら、

この時代を共に主の栄光の顕現を願いつつ、

設立 20 年を過ぎ、成熟した者(JPC)として

進んでまいりましょう。

主の年 1998 年 5 月 29 日

私たちキリスト信仰の世界に生きる者にとっては、元号下での生活はしていませんが、効用としては節目を持つことでの気持ちのリセットができるようです。世間では何か新しい風が吹いてくるような高揚した現象が感じられます。さて、表題の日時は、本会議(JPC)の設立した“とき”であり、新しい時代の始まりを告げるものであったかと存じます。即ち、使徒の働き 29 章のもとで、ご聖霊の働きが一層に輝きわたることを熱く期待し、国内の団体が共に一つになって、神の国を拡大・展開していくために情報共有し、研鑽し、かつ励まし合うことであります。

さて今回は「アジアに連なる」というテーマで研修会を開催いたします。ここには二つの動機があります。第一には、アジアの

一員としてアジアに仕えることです。ペンテコステの群れに与えられている個性として宣教というタラントが備えられています。使徒の働き 1 章 8 節「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」従いまして、この地の果てとは対世界であるのですが、私たちが立っているアジアに注視していく必要があるのではないのでしょうか。世界約 75 億中 53.8%・44 億のアジア人がいること、しかもその多くは他宗教を信奉していることなどを考慮したときに、私たちの果てすべき責任があるのでしょうか(48ヶ国)。時代は図らずも次に述べますが、アジアから日本に働きのために中長期滞在者が増加の一途を辿り、しかもその中には熱心なキリスト者が多数おられるのです。



土屋 潔

日本ペンテコステ協議会 議長/日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団 理事長
新潟グレイスチャペル

第二は、国内にあって世界宣教が果てせることです。日本にアジアの方々が働きに来られている方が増加している現況から、国内の教会も国際的視点、換言すれば多文化などを理解し、かつ積極的に宣教の力へと変換していくことが求められているという点です(2017 年度厚労省統計から一雇用者数 128 万人、国別では 1 位が中国が 29.1%・37 万人、2 位がヴェトナム 18.8%・24 万人、3 位がフィリピン 11.5%・15 万人)。実際に本教団の地方教会の一つは、アジア(マレーシア)からの職業訓練生が 2 年の契約で当該地に滞在し、礼拝に熱心に集いながら言語は十分ではなくても積極的に奉仕、特に奏楽などに参加しており、その状況で信徒たちも元気になってきているとの報告を聞いています。一方では、外国人の礼拝参加に扱いの戸惑いを感じている教会もあります。

最後に、内憂外患という言葉を日本の教会に当てはめるとすれば、内憂問題として教会の継承他を上げることができます。外患は内憂にも関わることですが一地の果て一に派遣する人材が減少し、もしくは派遣する力が十分ではないということが挙げられます。しかしながら、神の必然の中に立っているとすれば、地方の教会にも外国人礼拝者が点在し始めていて、それによる刺激を受けることで長きにわたってキリスト者の心に築かれてしまった 1%の壁を壊す可能性が萌芽し始めている時でもあります。ここに神からの恵みの“とき”であること感謝しつつ、これらの風(変化)にしっかりと向き合いながら、知恵と啓示の霊に満たされることに渴きながら、この時代を共に主の栄光の顕現を願いつつ、設立 20 年を過ぎ、成熟した者(JPC)として進んでまいりましょう。



阿見高洋

イエスキリスト福音の群
プレイズ・コミュニティ・チャーチ

日本は宣教者をアジアに、 そして世界に今までよりも さらに送る国となると私は信 じております。

■「この国の将来は？」

私たちの国日本は少子高齢化という大きな一つの流れの中にあります。日本政府は「2030 年問題」と表現して近い将来に起こり得る様々な事を問題意識して対策を練っています。2030 年問題とは、2030 年を迎える頃に表面化するいろいろな問題のことを指し、原因の根本にあるのは、人口構造の変化です。高齢化の流れは更に進み、2030 年における日本の総人口予測は約 1 億 1,912 万人と減少するうえに、その内の 31.1%にあたる約 3,715 万人が 65 歳以上の高齢者となります。つまり、3 人に一人が 65 歳の高齢者となります。(マイナ

ビリサーチより引用) 私達キリスト教会も、このままだと(今までの伝道方法では)クリスチャンの人口も減っていくと言われていきます。この実状と流れの中で私達はどう向き合い、また宣教の視点でどう分析してそれぞれの地域教会のコンテキストの中で大宣教命令を前進させていくことができるでしょうか？ピンチなのでしょうか？私はチャンスだと個人的に感じております！

■「外国人労働者宣教師という考え方」

日本政府は 2030 年問題の一つの影響は労働者人口の低下による労働力不足による経済的ダメージをあげています。その対策として外国人労働者の受け入れ扉を大幅に広げています。厚生労働省の調べによると外国人労働者数は平成 30 年 10 月の時点で 1,460,463 人で、外国人労働者を雇用する事業所数は 216,348 か所で、国籍別では、中国が最も多く 389,117 人(外国人労働者数全体の 26.6%)。次いでベトナム 316,840 人、フィリピン 164,006 人、インドネシア、ネパールの順番だそうです。(雇用の現場例:介護、ビルクリーニング、産業機械製造、建設、造船、自動車整備、航空、宿泊、農業、漁業、飲食料品製造、レストランなど)ビザは最長で宣教師よりも 2 年長い 5 年です。アジア各国からこの外国人労働者の枠を用いてクリスチャンがこの国に送られて来たらどうでしょうか？私はとってもワクワクしてなりません。既存の宣教団体を通した専門職としての宣教師にさらに神様は外国人労働者宣教師をこの国の収穫を共に取るために送られるの

ではないか、と考えています。そのような方々が実際にいらっしゃった場合、地域教会として彼らの様々なケア、霊的養い、共に宣教する関係の構築などが具体的に必要ではないかと思います。

■「異文化宣教者の育成」

私たちイエス・キリスト福音の群の神学校・拡大宣教学院では3年間の神学の学びと霊的な訓練の中に新たに4年前から取り組み始めたプログラムがあります。GLI (Global Leader Intern)という短期サマーコースで、8 週間の期間、海外からの学生(アメリカ、カナダ、中国、香港)と神学生をはじめ地元の東北の若い霊的リーダーの方々にこの訓練を提供しています。目的は主の弟子として共に成長を目指し、グローバルな視点で異文化宣教に取り組むことができる次世代リーダーを養成することです。全てのクラスと訓練が日本語と英語で行われます。VISION として ①神との関係の深化②コミュニティーでの弟子化③福音宣教を掲げて取り組んでいます。近い将来的にこのコースが一つの宣教師訓練センターとなり、外国人労働者宣教師を様々な方法で整え、地域教会と連携して共にこの国の霊的収穫のため、福音の届いていない未伝地にこの福音を届けるためにお仕えすることを目指しています。また、実際5年間そのような体験がされた外国人労働宣教師が帰国し母国で宣教のためにさらに用いられたら素晴らしと思います。また、日本からも異文化宣教者を整えアジア各国に遣わせ、日本は宣教者を

アジアにそして世界に今までよりもさらに送る国となると私は信じております。御国のため、この福音をあらゆる方法で届けるために共に聖霊のよって前進してまいりましょう！イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。マルコ16:15

《阿見高洋》



井野口靖久

神の家族キリスト教会
アガペチャーチ瑞浪

アジアの人々に喜んで仕え 神様の愛を喜んで届ける義務が日本にはある。

私たちの教団、神の家族キリスト教会は、カナダからの宣教師によって始まりました。私が現在遣わされている教会も、50 年前にカナダから宣教の思いをもった女性がこの町で宣教を始めました。名古屋の国際学校で先生をしながら伝道していたその女性は、英語を教えて欲しいとの誘いを受

けて名古屋から電車で 1 時間半ほど離れた山あいの町、岐阜県瑞浪市にやってきました。そして通っている電車の中で、神様からこの町に福音をとどけなさいという思いが与えられたそうです。彼女はこの町で宣教を始め、数年後に働いた給料で土地を買い、建物を建て、この町に教会を建ててくださいました。私たちの教会は、修理しながらですが、現在もその会堂を使って礼拝をしています。この女性の福音をとどける思いがなければ、今わたしたちの教会が行なっているこの地での働きはもしかしたらなかったかもしれません。

神の家族キリスト教会では、20 年前からフィリピンの人々を助けたいとの思いを受けて、NGO ハート・フォー・ザ・ワールド・ジャパンを創設しました。教団の教会と地域の教会の支援を受けて、フィリピンミンダナオ島に食料支援と学資支援を行なっています。アメリカの教会とフィリピンの地域の教会と協力し、スラムとなっている中にセンターを作り、子どもたちに支援を届けます。またその中から、現在 20 名ほど、学校の費用をサポートし、続けて大学や専門の学びへ進学できるように支援をしています。もちろん支援だけではなく、子どもたちと両親に聖書の話や賛美を通して神様の言葉を伝えます。失敗もありますが、これらの働きを通して徐々にスラムに住んでいた家族がキリストによって変えられ、イスラムだった家族がキリスト教会に行き、幼かったスラムに住んでいる子どもが教会のリーダーに変えられるのを見るときに、神様の素晴らしさを現地のスタッフと共に喜びます。

また日本からは年に 1 度か 2 度、短期のミッションツアーに行きます。地域の教会からも大学生や社会人を送ってくださり、スラムの子どもたちと触れ合い、人々に仕えます。多くの参加者が現地の子どもたちや現地スタッフと触れ合うことによって人生の考え方が変わったと証しています。

現地に行くとこのパウロの聖書の言葉がいつも思い起こされます。それは、マケドニアとアカイアの人々が、エルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために、喜んで援助をすることにしたからです。彼らは喜んでそうすることにしたのですが、聖徒たちに対してそうする義務もあります。異邦人は彼らの霊的なものにあずかったのですから、物質的なもので彼らに奉仕すべきです。《ローマ人への手紙 15 章 26～27 節》



私たちは、物質的なものを支援するために、フィリピンに行きます。しかし同時に現地に着き、子どもたちと遊んだり、ご飯を配ったりしていると、それを求めていっているわけではありませんが、霊的な満たしを

受けます。一緒にミッションツアーに行った多くの参加者が人々に仕えにフィリピンに行きますが、行く前よりも帰りのほうが元気になって帰って行きます。奉仕に行ったのに満たされて帰ってくる。神様の御業の素晴らしさをいつも体験しへりくだらずにはおれません。

「彼らは喜んでそうすることにしたのですが、聖徒たちに対してそうする義務もあります。」今の時代、アジアの人々に喜んで仕え、神様を愛を喜んでとどける義務がこの日本にはあるのではないのでしょうか。日本に福音が届けられました。そして今度は私たちができるものをもって、福音のバトンをアジアに、そして世界に届ける義務をつなげていきたいと感じます。

《井野口靖久》



辻 秀彦

サンビ教団 代表
ジーザスフェローシップ広島

アジアからの留学生や出稼ぎの方々がいます。その中で様々な支援から漏れた人たちに手を差し伸べるように心掛けています。

「アジアに連なる～小さな働き～」

彼女が落ち穂を拾い集めようとして立ち上がると、ボアズは若者たちに命じて言った。「あの女には束の間でも穂を拾い集めさせなさい。あの女に恥ずかしい思いをさせてはならない。」《ルツ 2:15》

ボアズとルツの関係は、キリストと教会（異邦人教会）の関係をたとえているとおもいます。ルツは異邦人であるにもかかわらず、ボアズと結婚できました。律法に反することですが、ナオミの相続地が守られるためにできたことでした。ルツはナオミの神を信じてベツレヘムまでついてきました。まさに、信仰によってイスラエルに受け入れられるという「信仰による義」が記されています。モアブの地から帰ってきたナオミとルツの生活は貧しいものでした。落ち穂を拾わなければならない状態でした。にもかかわらず、ルツは一生懸命落ち穂を拾い集めようと出かけて行っただけです。ボアズは、ナオミのためだけにルツをめとったとは思えません。ナオミに仕えるルツの誠実な美しい心にひかれたので結婚の決断をしたと思います。ルツのような教会が、主イエス・キリストに愛される教会と示され、教会ビジョンの一つとしました。それが「落ち穂拾いの教会」です。「落ち穂」とは、貧し

く虐げられている弱者、この世から捨てられ無視された人々であり、その人々を教会でフォローすることを務めとしています。



広島にアジアからの留学生や出稼ぎのかたがたがいます。その中で様々な支援から漏れた人たちに手を差し伸べるように心掛けています。フィリピンからの家族が礼拝に参加されていますが、彼らを通してフィリピンの教会への支援をしたりしています。私たちはルツのように微力な教会です。しかし、大きな働きはできていませんが、一人でも助けが必要な人々とかわりを持てるように目指しています。アジアからの来訪者が増えている今、少しでも多くのアジアの方々と連なる機会が与えられるように主に祈り続けています。そのようにして、広島にいるアジアの人々と連なっていきたいと願っています。

《辻秀彦》



安達隆夫
シオン宣教団 代表
大阪シオン教会

バルナバプロジェクトは少人数の小さな働きですが、神様が共にいてくだされば不可能がないことを悟らせていただきました。

2013年11月8日、フィリピンを風速90メートル超の大型台風が襲いました。レイテ島とサマール島は壊滅的な被害を受け、死者・行方不明者1万人以上、約80%の家屋、学校、教会が倒壊しました。このニュースを聞いて、教会に集う10名ほどの学生たちと共に自分たちに何かできることはないのかを考える機会を持ちました。「何かしてあげたいけれども思いつかない」「自分たちのような学生にできることは祈ることだけしかない」と言った消極的な意見が大半でしたが、一人の中学生が見た『僕たちは世界を変えることができない。』とい

う映画(普通の大学生が仲間と共に募金を集めてカンボジアに小学校を建てる奮闘記)からヒントをもらって自分たちも「フィリピンの壊れた学校を再建したい」という思いが与えられ、「バルナバプロジェクト」(初代教会のために全財産を捧げたバルナバに倣って学生が命名)を立ち上げました。

とはいえ彼らは学生でお金がありませんし、英語も話せません。また、フィリピンへのツテもありませんから、果たしてそんなことが可能なのか、全てが手探りのままのスタートでした。まずは日本国際飢餓対策機構(現ハンガーゼロ)に連絡し、趣旨を伝えて一度学生たちと共に現地に行きたいと伝えたところ、快諾してくださり、2014年3月春休みに5名の学生たちと共にフィリピンレイテ島の被災地に視察に行きました。被災から4か月余り経過していましたが、被災地はほぼ手付かずの状態で、すでに海外からのNGOは撤退していました。多くの人が風で飛ばされた板切れを拾ってきて建てたボロボロの家に住んでいて、全ての希望を失っているような状況でした。この姿を見たメンバーは自分たちはなんて恵まれているのだろうと感じ、なのにもいつも文句ばかり言っていたことを悔い改め、一日も早く子どもたちの将来のために学校を建て直し、安心して勉強できる環境を作りたいという思いが強くなりました。帰国後すぐに活動を始めました。学生ですから、お金はありませんし、勉強もしなくてはならないので時間も十分ではありません。それでも何とかしたいという思いで、資金集めのために3つのことを行いました。①.

『証しをすること』自分たちの教会内だけでなく、他の教会、通っている学校、特別な講演会、大学の講義など様々なところに招かれ、証しをする機会が与えられて、積極的に見てきたこと、体験したことを証しました。②.『CDの作成』自分たちがフィリピンで感じた感動や今、恵まれていることの喜びをオリジナルの曲にし、CDにしてコンサートを開いたり、聖会や大会などで賛美の機会をいただいて販売しました。③.『バザーの開催』近隣の方々にもこの事実を知って、協力してもらうためにバザーを行いました。たくさんの方々が来会してくださり、趣旨を理解して購入してくださいました。

こうして集めたお金をハンガーゼロを経由してフィリピン飢餓対策機構(FHフィリピン)に送金し、2015年にレイテ島のマブハイ小学校に最初の校舎が完成しました。さらに、2017年に同じくマブハイ小学校に2つ目の校舎が完成。2019年にはルソン島のバービン小学校に図書館が完成しました。



バルナバプロジェクトは少人数の小さな働きですが、神様が共にいてくだされば不可能がないことを悟らせていただきました。そして、今は「Take the first step to change the world」(世界を変えるために最初の一歩を踏み出そう)をスローガンに活動しています。

神様からいただいた溢れるばかりの恵みの中から、自分たちが与えられるわずかな愛をフィリピンに届けながら活動が続いています。

《安達隆夫》



吉田 隆

単立ペンテコステ教会フェローシップ
アジア・アウトリーチ・ジャパン主事

アジアの教会のリーダーたちが宣教に対して受け身である立場から、積極的な方向に乗り出さなければならぬ。

『PAMによる宣教の前進』

現在世界の総人口は 76 億人と言われています。そのうち 60%以上がアジア圏に住んでいます。東の果て、日の出る国日本に届いた福音を、まだ福音が行き届いていない地域に届けるのは、終わりの時代、日本の教会に与えられた使命です。

1994 年 2 月、単立ペンテコステ教会フェローシップ(TPKF)を開拓した北欧ペンテコステ教会の宣教師派遣のリーダーたちが、アジア諸国(宣教地)の教会の牧師たちと宣教師たちとを招いて、香港で集会を行いました。派遣者と実際に宣教をしている者と宣教師を受け入れている者の3者が出会ったのは初めてでした。この計画の中には、アジアの宣教団体であるアジア・アウトリーチの当時の総裁ディヴィッド・ワング師も関わっていました。

当時は在原宣教師がアルゼンチンに遣わされてまだ間もなく、私とその年の 8 月から香港に派遣されることになっていましたので、TPKF 教会が宣教師を派遣するという時代の幕開けであったとも言えるでしょう。

この集まりは、日本人の牧師たちにとっては、大きなショック(少なくとも私にとっては)でした。それまで私たちは、北欧・北米の宣教師たちに教えられて伝道・牧会の働きをしてきました。宣教師の教えは正しく、絶対だ、と考えていました。講師のワング師は、「あなたがたは『空を見ろ!』『鳥だ!』『飛行機だ!』『いや、スーパーマンだ!』という風に宣教師を見ていませんで

したか？ 宣教師たちもみな普通の人間です」と話しました。

もう一つ注目すべき経験は、同じ北欧の宣教師によって開拓されたアジアの異なる国々の牧師たちとの交流が始まったということです。各々が伝道・牧会に行き詰まりを感じる中で、国が違い、言葉が違っても自分たちの共通点を発見したのです。そこにはプラス面とマイナス面があることも分かりました。

セミナーが行われた時、参加者は中国本土へ電車に乗って聖書を届けました。当時は規制が厳しく、聖書を密輸するために香港から中国へ国境を渡る時は緊張し、身震いしたのを覚えています。そして廣州の家の教会を訪問。多くの日本の牧師たちにとって、初めての世界宣教体験でした。

アジアの教会のリーダーたちが宣教に対して受け身である立場から、積極的な方向に乗り出さなければならない。これから、アジアの宣教を、アジア人が負っていくなければならない。こうした考えから、様々なペンテコステ教団に声をかけ、回を重ねて、PAM(ペンテコステ・アジア宣教会議)という名前を掲げるようになりました。TPKF だけでなく、すべてのペンテコステ教会の力を合わせて宣教するためです。

この働きを開始してくださったフィンランドのアルト・ハマライネン師(現在世界ペンテコステ宣教議長)は、アジア人が責任を負うべきであるとの考えから、インドネシアの A.H.マンディ師(フォースクエア)に議

長を委ね、その後はバングラデシュのアサ・カイン師(アッセンブリーズ・オブ・ゴッド)が議長を務めてくださっています。かくして、JPC のご支援のもとに PAM が回を重ね、日本でも大会が 2 回開催されたことは嬉しい限りです。



宣教を展開する時に、教団ごとに宣教を行うのではなく、現地に既にある教会と力を合わせながら、教会開拓、孤児院や学校の建設などを協力して行えば、財政の無駄、人材の無駄など多くの無駄を省くことができるからです。

日本のペンテコステ教会が JPC の下に力を合わせることを決断し、前進しているように、PAM はアジアにおける宣教において、ペンテコステ教会の力を合わせて学び合い、前進しようとしています。

《吉田隆》



藤村良彦

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団

海外伝道部 部長

藤沢オリーブチャペル

アジアに連なるとは、現地の伝道者、クリスチャンから学び、受け取る姿勢が必要なのだと感じています。

1960年3月、当時アメリカに統治されていた沖縄に向けて派遣された伝道者が日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団最初の派遣宣教師となり、以後約60年間途切れることなくアジア各地を中心に宣教師を派遣してきました。私が海外伝道部員となって最初の仕事はカンボジアでの情報収集でした。様々な宣教師と会い、現状を調査していました。少しの空き時間アンコールワットを訪れ、現地の方々の生活に触れる機会がありました。そこで出会った小さな少女が「Give me \$1」と言いながら手を伸ばしてきた姿を忘れることができません。

\$1を得るためならどんなことでもするのかのような目をしていました。ある子供たちは手作りの民芸品を\$1で売っていました。\$1がこんなにも重たく感じたのは初めてでした。私たちは二人で1泊\$5の宿(名前はHotel)に泊まりましたが、欧米の宣教師たちは\$8の朝食を優雅にテラスで食べ、午後には\$5のドリンクでカフェの時間をもっていました。宣教地に暮らすとはどういうことなのか、考えさせられる視察となり、なぜ私はアジアの国に生まれ、アジアの国に生きているのか、そこに大きな意味があるのだろうか、そんなことを考え始めました。

フィリピンへは今まで多くの宣教師を派遣してきました。教団としては、深いつながりのある国ということができます。毎年体験ツアーを計画し、全国から参加者を募っています。プログラムは現地の方々の生活を体験することに多くの時間が割かれます。たくさん歩き、現地の子供たちとたくさん遊び、食べることで寝る場所は現地の方々のお世話になります。出されたものを「これは何？」と聞いてはいけないルールで、食べた後なら聞いてもいいことになっています。子どもたちとはいろいろ工夫しながら、言葉の壁を越えて一緒に遊びます。追いかけてまわしたりしているだけですが、心が通じてきます。そのような時間をゆっくり持つと、その晩教会で行われる集会には多くの方が集まってくださり、私たちの証に耳を傾けて下さいます。現地の伝道者たちは仕事をもちながら、互いに助け合い働きを進めています。華やかな伝道活動ではな

く、地道に、少しずつ、そして協力し合いながら主のために生きている現地伝道者たちの姿を見る度に、「共に福音に生きる」とはどういうことなのか、考えさせられます。日本でもこんな風に伝道者たちが協力し合いながら働きができればいいのにと、私の中では目指すべきモデルとなっています。アジアの一員として、他国への働きを進めていくと同時に、「アジアにつらなる」とは、現地の伝道者、クリスチャンから学び、受け取る姿勢が必要なのだと感じています。

『何のために生まれてきたのだろう』そんな疑問を心に秘めながら生きている若者たちがたくさんいます。アジアの他国に身を置くと、自分は豊かさの中に生きながらも苦しんでいて、貧しさの中にいる人々が笑顔に包まれていることに気がつきます。私たちアッセンブリー教団は台湾、モンゴルなどにも宣教師を派遣し、アジアの国々にお仕えしてきました。同じアジアにある日本だからこそできる働きがたくさんあります。この国に生かされているということの大きな意味が、アジアの国の方々にお仕えするときに明確になっていきます。宣教師派遣は決して華やかな働きではありませんが、着実に、そして確実に福音が根差している様子を、今現地で見るができます。そのような 60 年を教団全体が一致して歩んでこれたことに感謝しつつ、これからさらに多くのことを主は日本のクリスチャンに期待して下っているのだと確信しています。

《藤村良彦》



小川教将

日本オープンバイブル教団

海外宣教部

神戸キリスト栄光教会

いつも礼拝している同じ主がこの国(タイ)に生きて働いているのだと知ることができた…

「同じ主が働いておられる」

主の御名を賛美します。私が携わせていただいておりますユース海外アウトリーチの証を寄稿させていただきます。

1. 「海外アウトリーチを企画するまで」

私は 2014 年に神学校の海外アウトリーチプログラムでミャンマーへ行きました。現地に行くまでは楽しい観光気分が無かったと言えば嘘になります。私はこの国の貧困を目の当たりにしたことによりとてもショックを受けました。テレビで何度も見ている光景が目前にありました。目に入る情報だけでなく、匂い、音などがありました。そ

して、この国に起こっている麻薬、人身売買などの問題がありました。様々な問題がこの国にはあり、私が目には複雑すぎて何からその紐をほどいたら良いのかがわかりませんでした。ですが、唯一希望を見たのが、宣教師を通して福音が入っていることでした。私は、このアウトリーチプログラムで今までクリスチャンとして築き上げられたものが土台から変わったように思えます。そして同時に私が所属する日本オープンバイブル教団で若者の海外アウトリーチプログラムを企画する思いが与えられました。

2. 「タイ国での働き」

教団がサポートしてくださったことにより、ユース海外アウトリーチはスタートすることができました。2017年、2018年と2年連続で、私たちはタイの北部チェンマイ県とチェンライ県を中心に一部ミャンマーにも行きました。そこでは小学校での伝道イベントもさせていただきましたが、主に現地教会・クリスチャン運営の児童擁護施設でした。私たちは社会問題となっている麻薬・人身売買を聞きしました。タイでは麻薬に関して捕まると20年近くの実刑になってしまうそうです。そのことにより両親が捕まって、孤児となるそうです。児童擁護施設ではまさに親が子を売ろうとしていたところを施設の人が助けだしたという話も聞きました。そのような子供達が、ご飯を食べることができ、デボーションができることを神様に感謝していますという証はユースたちに多くの刺激を与えてくれました。

参加したユースたちはほぼ全員クリスチ

ヤン家庭に育った2世、3世です。日本にある教会しか知りませんでした。いつも礼拝している同じ主がこの国に生きて働いているのだと知ることができたと証してくれました。私がミャンマーで受け取ったことを彼らが受け取ったことも私はうれしく思います。

3. 「主に従い、アジアと連なる」

タイ国は虫も多い、食事も合わないこともあります。社会問題で心が落ち込むこともあるでしょう。ですが、主は生きて働いておられる。伝道イベントを中心とした働きをしてはいませんが、彼らの宣教に対しての考えが変わりました。a. 「祈りが変わる」現地での交わりを通してアウトリーチに参加した者達は祈りが変わりました。現地のことを覚えて祈るときが増えました。b. 「教会生活が変わる」宣教師が教会にデピュテーションに来た時にできるだけ参加するようになりました。経済をもって宣教師をサポートすることもしている者もいます。海外から短期宣教チームが来た時に受け入れることに積極的になりました。

今年は、カンボジアへ私たちは導かれています。主は私たちにできる働きを用意してくださっています。日本で働かれている主が私たちを導き、さらなる恵みを用意してくださっていることを期待しつつ参加していきます。

《小川教将》



伊藤正澄

日本チャーチオブゴッド教団

宣教局長

湘南セントラルチャーチ

「アジアに連なる」。それが言葉だけの、表面的なものとならないためには、互いの心の中に越えなくてはならない心の壁があるのではないだろうか。

「心の壁を越えて」

最初に韓国の兄弟姉妹たちに会ったのは 2013 年 12 月の初めであった。韓国の教会が日本宣教のために日本の教会で「キムチ・セミナー」を開催するためにチームを送って下さったのである。空港まで韓国チームを迎えに行くことになったが、彼らに会う私の心には平安がなかった。というのも、その頃の日韓関係は、前年に韓国の李元大統領が竹島に上陸したことによって急速に悪化し、韓国政府や世論の日

本に対する姿勢は強硬なものとなっていたからである。メディアを通して抱いていた韓国人に対する私のイメージは、いつも怒っている姿であった。

「どのような人たちが来るのか。日本に対して悪い気持ちを持っていないだろうか。怒られはしないだろうか。」 空港で大きな荷物と一緒にいる韓国人の団を見た時、私の緊張は頂点に達した。とりあえず、韓国人宣教師を介して簡単に挨拶を交わした後、車に乗り込んだ。車中の彼らはとても楽しげで賑やかであった。通訳を通して、私も彼らと会話を交わすことができた。そのような中で、「この人たちは悪い人たちではないな」と感じるようになった。

韓国チームが日本に滞在していたのは 3 泊 4 日であった。その間、私も彼らと行動を共にした。共に食事をし、共に祈り礼拝し、共に奉仕をした。そのような中で、次第に彼らに対する思いが変えられていった。韓国人の情熱的な信仰については知っていたが、彼らの中に幼子のような純粋さや素直さを見ることができた。とても人情が厚く、素朴な人たちであった。次第に、彼らと打ち解け合うようになった。

夕食の後、私の方から「過去に日本があなたたちにしたことを赦してほしい」と切り出してみた。すると神妙な雰囲気となり、みな涙を流し始めた。その時、思った。韓国人の人は、私たち日本人が思っている以上に心に傷を負っているのだと。その場には日本に対して怒りをぶちまける人は誰もいなかった。みな私を受け入れてくれ

た。「ありがとう。日本を愛します」と言ってハグしてくれた。そして、「日本を赦さない韓国を赦してほしい」と。この時から、単に親しくなっただけではなく、互いの信頼と尊敬が強められたような気がする。

その年から毎年、韓国チームがやって来た。キムチ作りを教えることを通して、日本の教会に日本人を誘い、福音を伝えるために。今では、韓国の 2 教会から 40 人の兄弟姉妹たちが来て(それでも人数制限をしている)、日本の 5~6 教会で奉仕するようになった。キムチ・セミナーはとても好評で、回を重ねる毎にリピーターが友人や家族を誘うようになり盛況なものとなっている。また、そこには政治の世界では見られない、日本人と韓国人が和気あいあいと交流を楽しんでいる姿がある。福音を語ることも良いが、日本人と韓国人が主にあって和合している姿が何よりもの伝道ではないかと思う。「ここに神がいる。ここに天国がある」と。

「アジアに連なる」。それが言葉だけの、表面的なものとならないためには、互いの心の中に越えなくてはならない心の壁があるのではないだろうか。そして心の壁を超えるためには、共に食事をし、共に祈り礼拝し、共に奉仕をする中で、互いに知り合うことが必要なかもしれない。

《伊藤正澄》



日本の教会は宣教師を送らずとも、今あるところで、世界のあらゆる外国人と交流を持ち、宣教をすることができるのです。

■「今、ここにある世界宣教」

現在、日本国内にどれほどの外国人が在留しているかご存知でしょうか。法務省の統計では 2018 年末時点で日本全国には 273 万 1093 人の外国人が在留しており、これは 4 年連続で過去最多を更新したと報告されました。国籍・地域別では中国が 76 万 4720 人と最も多く、鳥取県の人口 55 万 9701 人(2019 年 1 月)を超えるものとなっています。

また、昨年末出入国管理法が改正し、今年 4 月からは特定技能制度が施行され、厚生省は 5 年間で約 35 万の労働者を外

国から招聘し、建築、農業、漁業などに従事させ、日本の産業における人手不足を補うことを計画しています。

これから、東アジアからだけではなく、イスラム教圏、インド周辺のヒンズー教圏からも、ますます多くの外国人が日本にやってくることを予測できます。聖書の中に繰り返し言われている「旅人をもてなさい」(ローマ 12:13、I テモテ 5:10、テトス 1:8、ヘブル 13:2)というみことばに対して日本の教会がいかにあるべきか、主に問われることになると思います。

私は、このような状況の背後には、神様の御旨、御心があると信じます。日本の教会は宣教師を送らずとも、今あるところで、世界のあらゆる外国人と交流を持ち、宣教をすることができるのです。それは現在宣教が非常に困難な国や地域に宣教する一つの突破口になるのではないのでしょうか。

■「弟子育成こそ世界宣教の基礎」

福音書を見ると、イエス様の 3 年半といわれる公生涯の大部分の時間は弟子たちと生活されていることが分かります。またイエス様はよみがえられた後、弟子たちに「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい・・・」(マタイ 28:19)と言っておられ、弟子育成の重要性を説いておられます。

在留外国人に福音を伝え、救いに導き、教会の忠実な信徒にすることは大切なことです。しかし、それだけでは十分ではありません。主の弟子となるために育成する必要があります。何年間かの日本在留期間

が終わり、母国に戻る時がやってくるでしょう。その時まで、彼らを主と弟子として育て、母国へ宣教師として遣わすのです。彼らは帰国後インサイダーとして自分の故郷で福音を伝え、集会を始めることができるのです。しかし、ここで一つ注意しなければなりません。それはイスラム教圏、ヒンズー教圏などに帰国する場合、欧米式(日本式?)の教会形成では非常に危険が伴うということです。上述したような国や地域では公にトラクト・ビラなどを配布することはできません。外国人伝道者を招き、ホールや球戯場を借りての伝道集会をすることはできません。会堂を建て、バンドやワーシップチームによる集会は非常に困難です。そうであるならば、彼らが日本にいる時から、そのような環境でも伝道できるような弟子育成が必要になってくるのです。

■「日本の教会の使命」

「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」(マルコ 16:15)のみことばは他国の教会と同様に、日本の教会にも語られています。しかし、それと同時に日本の教会に対して、主は特別な計画と使命を与えてくださっていると信じます。それはアジア諸国からやってくる多くの外国人に福音を語り、つながりを持ち、弟子育成し、派遣し、協働することです。このような世界宣教の使命を日本の教会が果たすことができるならば、主の大きな喜びでしょう。

《竹内宜雄》



ジョン・バチガルポ

日本フォースクエア福音教団
ホープチャペル沖縄

私達は《中略》～力が私達には無いという事を知りつつも、フィリピンにおける神様の働きを開始しました。私達が初めから知っていた事は、私達にも何かが出来るという事だけでした。

私達の教会員の一人であるミラさんが提案した事によって、ホープチャペル沖縄は、10年ほど前にフィリピンでの宣教活動を開始いたしました。

ミラ・ガウディアさんとはトニー・アグランという牧師の紹介を通して知り合いましたが、このトニー牧師が私達をフィリピンにもつなげてくださり、彼の助けによって私達はフィリピン各地に四か所の教会を開拓する恵みが与えられました。

トニー牧師に箱を送る事を通して、私達はフィリピンの兄弟姉妹を支援し始めました。この箱は一つ当たり定額 15,000 円で沖縄からフィリピンに送る事が出来るもので、これまでに古着や靴などの援助品を入れて 400 箱程を送りました。私達にとっての接点であり代理人であるトニー牧師は、これらの箱を用いて恵まれない子ども達や貧困家庭などに祝福を届けました。それらの品々を提供する事によって、イエス様を知らない多くの人々に福音を延べ伝える機会が私達に与えられています。

私達がフィリピンで開拓した四か所の教会と牧師達を紹介します。①「ホープチャペル・ラスピニヤス」ファウスティノ M. アグラン牧師 ②「ホープチャペル・ビナロアン」レテシア・カントゥバ牧師 ③「ホープチャペル・アジョン」フェルナンド・モネス牧師 ④「ホープチャペル・オスロブ」レイナルド・ロダ牧師。フィリピンの四つのホープチャペル教会の礼拝所と教会活動の拠点を作る為に、私達は米国からテントを購入して送りました。これらのテントを購入して郵送する為には一張りにつきおおよそ 11 万円かかりましたが、そのうちの三張りは現在でも使用されています。上記に加えて私達は、キリストにある兄弟で友人でもあるアート・ジョーナルズ主教にもテントを届けましたが、彼はそれをフィリピン各地で行っている福音伝道活動に用いています。



私達のこれからの計画には五つ目のホープチャペルをミンダナオに今年開拓する事が含まれています。私達はこの機会にととてもわくわくしています。というのはミンダナオに多くのイスラム教徒がいるので、大いなる知らせとイエス・キリストの福音が語られるべき確かな必要があるからです。

私達が見返りとして受ける大きな祝福の一つは、フィリピン宣教旅行として年に一回フィリピンに行けるという事です。毎回の旅行でフィリピンの兄弟姉妹がどれほど機知に富んでいるか、そして私達の小さな贈り物を彼らがどれほど喜んで受け取っているか、という事を実際に見ていつも驚かされています。各地を訪れる中で多くの人々と話をしますが、これほどに人口の多くが貧窮化しているにもかかわらず、彼らが主への大きな希望と愛を持っている事を目の当たりにして身が引き締まる思いです。フィリピンの人々は私達が彼らを助ける為に来て、私達が物を与えていると思っています。しかし、彼らこそが私達に多くの希望を与えている事、そして彼らの愛と思いや

り、そして主への燃える思いを見て私達がどれほど感動しているか、彼らには想像もつかない事でしょう。私達はこれまでの訪問を通して大きな祝福を受けています。

ホープチャペル沖縄はどう誇張しても決して大きな教会ではありません。私達の教会は大人 50 名程、子ども 25 人程で構成されています。私達のような小さな教会が出来た事に対して、大きな教会に違う事が要求されている事は無いでしょう。必要なのは大きな心、そして神様に対する完全な信頼と信仰を持つ事です。

私達ホープチャペルは、何でもできるというような資源や力が私達には無いという事を知りつつも、フィリピンにおける神様の働きを開始しました。私達が初めから知っていた事は、私達にも何かが出来るという事だけでした。神様のみ言葉と愛の恵みを出来るだけ多くの人々に届けるという特権を与えられ、私達はとても祝福されています。これまでの間、神様からの大いなる祝福をうけて私達は喜びで溢れています。

《ジョン・バチガルボ》



津坂良夫

日本ベテルミッション 代表
福生ベテル教会

福祉の隙間に落ちてしまいかねない人々を長年にわたって援助して…

外務省の定義によれば「アジア」は、東アジアや東南アジア、南アジアの一部も指しますが、国連の定義によるとその範囲はさらに西アジアの中東にまで及びます。そこで今回は、日本からは少し遠い中東にあるイスラエルとの連なりについてお話したいと思います。私たちはB.F.P（ブリッジス・オブ・ピース）を通して、イスラエルのエルサレムとの関わりがあります。

パウロは、ローマ書でユダヤ人から私たち異邦人クリスチャンは霊的なものを豊かに与えられたのだから、物質的なものをもって彼らに奉仕することは義務であると語っています。「彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は

霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。」ローマ書 15 章 27 節—— このみことばにあるように、私たち異邦人クリスチャンは、ユダヤ民族を通して「聖書」と「救い主」という霊的な素晴らしい祝福を受け取ることができました。そこで現在、私たちがこのみことばを具体的に実践するために、B.F.P を通して、イスラエルのユダヤ人に対して支援を行っています。具体的には次のような支援活動に参加してきました。

■1. 「タウンサポート」

この支援は B.F.P を通してイスラエルに住む貧しいユダヤ人に対して行われています。特に財政難に苦しむ、北はガリラヤ地方から南はネゲブ砂漠までの 18 の町々に食料配布や公共施設の建設のための支援を行っています。私たちの教会のタウンサポートは、エルサレム市に対してなされています。特に B.F.P は、福祉の隙間に落ちてしまいかねない人々を長年にわたって援助してきました。現在エルサレムでタウンサポート支援を受けているのは 80 世帯で、ホロコースト生存者や新移民、一人親家庭など最も貧困で苦しんでいる世帯に対してなされています。私たちの教会のタウンサポートは今年で 15 年目を迎えました。

■2. 里親プログラム

様々なサポートの中には、個人的にユダヤ人を支えるプログラムもあります。その

ひとつが「里親プログラム」です。このサポートはイスラエルに移住したばかりの新移民がヘブライ語習得や職業訓練に集中し、就職して自立できるようになるまで、生活必需品や食料を1年間支援する働きです。今回日本ベテルミッションでは、イスラエルツアーを主催し、そのツアーの中で、エルサレムにあるフードバンクを訪問した際、ある里親の方と支援者の方が面会することが出来ました。(写真の方々は、支援者であった工藤先生と新移民の青年です)

■3.「老人ホーム訪問」

そのツアーの中、私たちは、B.F.P がサポートしている「老人ホーム」に訪問をする機会が与えられました。1 時間という短時間の訪問でしたが、私たちは、老人ホームに入居している方々との交流の時を持つことができました。私たちがイスラエルの国歌のハクティバをフルートの音色に合わせてヘブル語で歌うと、利用者の方々が今度はマイクを持ってヘブル語で得意の歌を歌ってくださいました。又私たちは日本の童謡「ふるさと」に合わせてリハビリ体操を皆さんと一緒にすることもできました。又ゴスペルフラを踊るプログラムも加えられ、約1時間の交流の時を持つことができました。利用者の方々にはユダヤ人だけでなくアラブ人もいらっしやって、良い交流の時であったと思います。この様な交流が少しでもユダヤ人の方々への祝福となり、クリスチャンとユダヤ人の理解が深められ、和解に結びつくことを願っています。

《津坂良夫》



榮義之

日本ペンテコステ教団 代表
生駒聖書学院

伝道師夫妻が、フィリピンマニラでの賛美集会ゲストに招かれ活躍。《中略》これからも大きく展開していくことになります。

しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。使徒 1:8

聖霊様を歓迎し、終末の時代の世界宣教を考えると、アジアに連なる日本の令和の使命は大きいのです。人口増加の一途をたどる中国は、2030 年までにさらにクリスチャンが 30 億も増加すると予測されています。しかし、昨年クリスマス廃止運動や、教会の十字架撤去など締め付けも厳しくなりつつあります。教団教会の中国宣

教への取り組み、北朝鮮脱北運動など、書きたいことはたくさんありますが。宣教に取り組んでいることをお祈りください。

4 月は伝道師夫妻が、フィリピンマニラでの賛美集会ゲストに招かれ活躍。継続して生駒聖書学院神学生も加わり、これからも大きく展開していくことになります。マレーシアからの賛美チーム。台湾からのグループ等、アジアとの交流も盛んになります。

具体的方策はまだないけれども、宣教師を送り出すよう祈っています。

《栄義之》



志垣重政

フルゴスペル^(純福音)日本総会 総会長
東京純福音教会

21 世紀は、アジアが世界宣教を主導する時代となります。」「アジアでリバイバルをしている教会は、聖霊運動を主導している教会です。

現在、ヨイド純福音教会は、世界 60 カ国に 700 人の宣教師を派遣して純福音の五重の福音と三重の祝福、福音と聖霊の働きを伝えています。また、世界各地で神学校を設立し、多くの教役者を輩出してきましたが、その数は優に 2,000 人を超えます。その数の半数はアジアが占め、わが日本から、また名を伏せて宣教に励んでいる第三国の宣教師まで様々です。

1964 年、趙ヨンギ牧師が初めて米国で福音を伝えたことをきっかけに、ヨイド教会の海外宣教が始まりました。1975 年 4 月には、純福音宣教会が設立され、海外宣教が本格化します。その中で 1978 年には日本宣教会が発足し、福音不毛の地といわれた日本を抱いて祈る「日本 1 千万救霊運動」が始まりました。

ヨイド純福音教会の最初のアジア宣教は、1974 年、故崔子實牧師の日本宣教から始まりました。東京で捧げられた家庭礼拝が純福音東京教会のルーツになります。1976 年には、大阪に純福音亜細亜宣教会日本地区連合会を組織、1978 年には神戸に純福音亜細亜地区連合会が結成されます。同年、趙牧師は、アジア地区の牧師たちが集う、全アジア教会指導者セミナーを開きます。また 1977 年、78 年には、趙牧師、崔牧師が東京で聖会を導きました。80 年代に入ると趙牧師は、日本全国で聖会を開きます。1982 年には、日本一千万救霊のための教役者セミナーと、第一回訪韓信徒大会が始まります。

1986 年には、アジア全域を対象とした

聖徒たちが韓国を訪問して純福音の聖霊運動を直接体験するアジア信徒訪韓大会が始まり、現在その数は 5000 名にまで膨らんでいます。



ヨイド教会の宣教は、1993 年、第 20 回世界宣教大会を境に、既存のアメリカとヨーロッパを中心とした宣教から、第三世界先住民宣教に方向を転換しました。そしてその働きの中心は、アジアへと移行しています。

現主管牧師李ヨンフン牧師は、これからのアジア宣教の活性化を願い、アジア地域各国のリーダー的牧師たちを中心として、2013 年香港でアジアリーダーズサミット(ALS)を組織、毎年各国でアジア宣教に関する意見交換と協力を持つミーティング開催しています。メンバーには、李ヨンフン牧師を代表とし、エドモンド・テアー師(香港 ICA)、クマル師(インドカルバリチャペル)、オバジャ師(インドネシア GBI)、アルピン師(インドネシア ROCK MINISTRY)、エレミヤ師(マレーシア NEW LIFE CHURCH)、ボンセント・レオ師(マレーシア・

グレイドタイティン AOG 教会)、エドモンド・チェン師(シンガポール CEGC)、金ジョンソク師(光臨教会)、韓ギッチェ師(中央ホーリネス教会)、高ミョンジン師(水原中央バプテスト教会)、朴ソンミン師(韓国 CC C)、そして日本からは、細井眞師(JPN 代表)、志垣重政師(純福音東京教会)がボードメンバーとして加わっています。

また李ヨンフン牧師は、一昨年台湾台北で開催された ALS のミーティングを終え、現地のキリスト教メディアへのインタビューで、このように語りました。「19 世紀、世界の宣教はイギリスを中心として行われ、20 世紀はアメリカ中心でした。しかし 21 世紀は、アジアが世界宣教を主導する時代となります。」「アジアでリバイバルをしている教会は、聖霊運動を主導している教会です。聖霊運動をしている教会が、このように集まり、アジアの福音化のために協力し、祈ることができることを神様に感謝したいと思います。」

また今年の秋には、2013 年に香港で初めて開かれ、今回、第七回目となる、ALS 主催の、教職者セミナーが以下の予定で開催されます。2019 年 9 月 17 日(火)、純福音東京教会で、18 日(水)新宿文化センターで。17 日に関しては、参加条件があります。また 18 日は、オープンですので、どなたでもご参加いただけます。時間など詳しくは、教団にお問い合わせください。

《志垣重政》

■ JPC 雑感

日本ペンテコステ協議会 前 書記 佐藤成紀

「JPC(日本ペンテコステ協議会)雑感」

2018 年 11 月 20 日(火)正午より、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団中央聖書神学校チャペルにて、日本ペンテコステ協議会総会が開催されました。11 教団から計 18 名の出席があり、また細井眞 JPN 代表のオブザーバー参加もありました。



寺田文雄議長が挨拶をし、昼食後に各教団から近況報告がありました。JPC 副議長の永井信義師がディボーションを担当し、詩篇 103:1-5 から「神様を良いお方と信じ、語り続けること」の大切さが強調されました。前回議事録、2018 年度活動および会計報告について説明があり、満場一致で承認されました。JPC から細井眞師を次期 JPN 常設委員として推薦した旨の報告もありました。続けて、JPC 新議長が土屋潔師になったとの報告があり、その他役員には副議長に中見透師と永井信義師、書記に八束選也師、会計に吉永豊師、監査に樋口章代師がそれぞれ選出されました。また、以下の 2019 年の活動計画について確認がありました。

■ 日本ペンテコステ協議会研修会

日 時:2019 年 6 月 13 日(木)10:30~16:00

場 所:日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団 中央聖書神学校チャペル

会 費:一人 3,000 円

礼拝説教・講演:李ヨンフン師

テーマ:「アジアに連なる」

■ 日本ペンテコステ協議会総会

日 時:2019 年 11 月 21 日(木)12:00~16:00

場 所:日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団 中央聖書神学校チャペル

2019 年度予算の諸項目について説明がなされた後、2019 年度の計画と予算案は満場一致で承認されました。

その他、翌日の JPN 懇親会や 9 月に開催された PAM(ペンテコステ・アジア宣教会議)日本大会の報告、さらに JPF カンファレンス、教会増殖セミナー、ペンテコステ世界大会等の案内もなされました。また、いのちのことば社・根田祥一氏をお招きし、クリスチャンメディアに関する情報提供も受けました。最後に祈りをもって、総会が終了しました。

■ JPC 規約

1) 本会は、名称を『日本ペンテコステ協議会』(Japan Pentecostal Council 略称 JPC)とする。

2) 事務局

本協議会の事務局を日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団本部に置く。

3) 目的

本協議会の目的は、日本におけるペンテコステ信仰の健全な成長と発展を促進するために、ペンテコステの教団及び教団に準ずるグループの指導者・教職者間における交流を深め、情報交換及び相互理解を図り、教職研修を行うことにある。

4) 信仰宣言

本協議会の構成員は、以下の信仰宣言を告白するものとする。

1. わたしたちは、聖書が靈感された、唯一の誤りのない権威ある神の言葉であることを信じる。
2. わたしたちは、父と子と聖霊の三位において永遠に存在される唯一の神を信じる。
3. わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの神性、処女降誕、罪のない生涯、奇跡、十字架の血による代償的贖罪的犠牲、肉体をもつての復活、父の右の座への高举、また、力と栄光の中での再臨を信じる。
4. わたしたちは、失われた罪人のためには、みことばと聖霊による新生が不可欠であると信じる。
5. わたしたちは、異言の証拠を伴う聖霊のバプテスマを信じる。
6. わたしたちは、聖霊の今日的働きによる肉体の癒し、および種々の聖霊の賜物を信じる。
7. わたしたちは、聖霊の内在によって清い敬虔な生活が可能となることを信じる。
8. わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストにおける信者の霊的一致を信じる。
9. わたしたちは、聖徒の復活、失われた者の審判、新天新地を信じる。

5) 活動

定期的に会議を開催し、各教団及びグループの指導者・教職者間の交流、意見・情報の交換、研修
その他必要な活動を行う。広報誌と機関誌を発行する。

6) 総会

本協議会は最高議決機関として総会を置く。総会は、加盟教団にそれぞれの教会数に応じて割り当てられた数の代議員によって構成する。

50 教会以下 代議員 1 名 51～ 100 教会 代議員 2 名 101 教会以上 代議員 3 名

7) 役員

本協議会に議長、副議長、書記、会計を置き、その任期を 3 年とする。役員会は議長によって召集され、定期的に開催する。

8) 監事

本協議会に監事を置き、その任期は役員の任期に準ずる。

9) 経費

本協議会の経費は、加入団体の負担とする。

10) 附則

本規約は、1998 年 5 月 29 日より実施する。この規約の変更は総会の議決を経て実施する。

本規約は、2003 年 3 月 25 日および 2014 年 11 月 27 日に改正された。

■ 2018 年度会計決算報告書

2017年11月1日～2018年10月31日

収 入 の 部				支 出 の 部			
項 目	予 算	決 算	備 考	項 目	予 算	決 算	備 考
協 力 金	540,000	560,000		総 会	40,000	43,395	
一 般 献 金	100,000	50,000		役員 活動費	190,000	148,710	
研修会礼拝献金	80,000	63,300		研 修 会	240,000	171,335	
研修会 会費	180,000	131,000		J P N 年会費	65,000	40,000	
J P N 年会費	65,000	40,000		JPN協力献金	30,000	30,000	
JPN協力献金	30,000	30,000		PWF 負担金	60,000	59,615	500米ドル+送料
雑 収 入		5		PAM 負担金	60,000	56,800	500米ドル
				JPCニュース	115,000	106,480	
				新 聞 広 告	70,000	72,360	
				事 務 諸 費	20,000	10,000	
				PWC参加積立	50,000	50,000	
				予 備 費	55,000		
小 計	995,000	874,305		小 計	995,000	788,695	
前年度繰越金	751,982	751,982		次年度繰越金	751,982	837,592	
合 計	1,746,982	1,626,287		合 計	1,746,982	1,626,287	

<協力金納入団体>

神の家族キリスト教会	40,000	2017・18
単立ペンテコステ教会フェローシップ	50,000	2018
日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団	150,000	2018
日本チャーチオブゴッド教団	50,000	2018
イエス・キリスト福音の群	20,000	2018
日本ネクスト・タウンズ・ミッション	20,000	2018
日本フォースクエア福音教団	40,000	2018
シオン宣教団	30,000	2018
日本オープン・バイブル教団	40,000	2018
日本ベテルミッション	20,000	2018
日本ペンテコステ教団	30,000	2018
サンビ教団	20,000	2018
フルゴスペル(純福音)日本総会	50,000	2018

<PWC参加積立>

2017年度	50,000円
2018年度	50,000円
小計	100,000円

<残金総額>

会計残	837,592円
積立金	100,000円
合計	937,592円

<協力金・献金等の振替口座>

【ゆうちょ銀行】加入者名:J.P.C 口座番号:00150-6-99177

■ 日本ペンテコステ協議会 加盟団体一覧 (50 音順)

イエス・キリスト福音の群	代表	永井信義
〒981-3604 宮城県黒川郡大衡村ゴスペルタウン 東北中央教会 TEL 022-345-2991 kakudai@ruby.ocn.ne.jp		
神の家族キリスト教会	代表	水野明廣
〒464-0094 愛知県名古屋市千種区赤坂町4-64 クリスチャンライフ TEL 052-721-7831 info@christian-life.jp		
サンビ教団	代表	辻 秀彦
〒730-0812 広島県広島市中区加古町14-8 ジーザスフェローシップ広島 TEL 082-241-8957 jfhkakomachi@yahoo.co.jp		
シオン宣教団	代表	安達隆夫
〒920-0816 石川県金沢市山の上町26-48 金沢グレイスチャペル TEL 076-253-1790 joshua1992shingo@icloud.com		
単立ペンテコステ教会フェローシップ	議長	小山大三
〒509-0141 岐阜県各務原市鵜沼各務原町4-406-11 岐阜純福音教会 TEL 058-385-0670 mail@gifujun.com		
日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団	理事長	土屋 潔
〒170-0003 東京都豊島区駒込3-15-20 TEL 03-3918-5935 japanaog@ag-j.or.jp		
日本オープンバイブル教団	代表	菅原 亘
〒653-0845 兵庫県神戸市長田区戸崎通3-9-12 神戸キリスト栄光教会 TEL 078-612-5511 (denen-chapel@mpd.biglobe.ne.jp 山口)		
日本チャーチオブゴッド教団	監督	八束選也
〒146-0093 東京都大田区矢口2-1-18 東京ライトハウスチャーチ TEL 03-3758-1625 eriya@cog.jp		
日本ネクスト・タウンズ・ミッション	代表	岩井繁信
〒513-0035 三重県鈴鹿市矢橋町471-2 鈴鹿キリスト福音教会 TEL 059-383-5145 elim@mecha.ne.jp		
日本フォースクエア福音教団	総理	大城けい子
〒359-1125 埼玉県所沢市南住吉10-8 教団本部 TEL 04-2923-1858 https://www.japan-foursquare.jp/form.html		
日本ベテルミッション	代表	津坂良夫
〒197-0003 東京都福生市熊川1101 福生ベテル教会 TEL 042-551-1327 fussabethel@gmail.com		
日本ペンテコステ教団	代表	榮 義之
〒630-0243 奈良県生駒市俵口町951 生駒聖書学院 TEL 0743-74-7622 elimyoshi@kcn.jp		
フルゴスペル(純福音)日本総会	総会長	志垣重政
〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町2丁目2-19 純福音東京教会 TEL 03-3232-0667 (m.senoo1001@gmail.com 妹尾)		

JPC

Japan Pentecostal Council

日本ペンテコステ協議会
《事務局》

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団 本部内
〒170-0003 東京都豊島区駒込 3-15-20
TEL.03-3918-5935 FAX.03-3918-0474